

### 日本人によるビヤ毒殺未遂事件

ビヤを逮捕する能力がないことを実感したパーシングと彼の部下、アメリカ政府高官の間に挫折感が広がる中、アメリカの諜報機関はビヤの居場所を突き止めようと懸命の努力を重ねた結果、メキシコ北部に住む日本人を使用することにした。日本人を起用するのは、日本はビヤ派からもカランサ派からも同盟者と見られていたこと、それ以上に、パンチョ・ビヤは中国人を毛嫌いしたのと裏腹に、日本人を好み、ときに賞賛したということをアメリカ諜報関係者が知っていたためである。

ビヤに近い日本人を使用することを考えたのは捜査局エルパソ支局長 E. B. ストーンであった。1916年6月13日、ストーンは二人の日本人をインタビューした。その一人、立松源一 (Gemichi Gustavo Tatematsu) はパンチョと弟イッポリトの両家に仕えた召使で、特にイッポリト家とは長い関係があった。立松はイッポリトの妻がキューバから発送した1916年5月31日付けの手紙を持っていた。イッポリトが間もなくハバナを発ちロスアンゼルスへ向かうので、ロスアンゼルスへ来るよう指示をした内容であった。立松に伴われて来た二人目は、早川 (Lucas G. Hayakawa) である。早川はエルパソにあるフォート・ブリッスの陸軍諜報部隊への情報提供者であると同時にフアレス市のカランサ軍司令官ジェネラル・ガブリエル・ガビラの密偵で、フアレス守備隊のために武器弾薬の密輸をしていた。早川もパンチョとイッポリトから厚い信頼を受けていると立松は言った。面接から三日後、二人は正式に捜査局のスパイに認定され、立松はロスアンゼルスへ出張する前途金百ドル、早川は五十ドルを受け取った。<sup>52</sup>

6月17日、立松は紺のスーツに白靴、パナマ帽姿で、ストーンからブランフォード諜報員あての紹介状を携え、列車でロスアンゼルスへ出発した。イッポリトが到着するのを待ち構え、逮捕する計画であったと思われる。立松を駅に出迎えたブランフォードは、身元を確認してから翌日出頭を命じた。ビヤ派関係者からの情報で、イッポリトは予定を変更し、まだキューバにいることを立松が伝えると、ブランフォードは立松をキューバへ送るかどうかに上司に指示を求めたが、その必要はないとされた。ブランフォードは立松を使って南加日系人の情報を集めようとしたが、日本や同胞の不利益になるような情報は一切渡さないと拒んだという。

立松は JAT、早川は JAH というコードをもらって国境でスパイ活動をするようになった。6月26日、ストーンはもう一人日本人をリクルートした。森少佐に伴ってビヤを訪問したフアレス日本人会長土屋秀吉である。エルパソの移民局が彼を推薦したという。土屋はフランク (Frank) の名前を貰い、サンアントニオにいるストーンの上司、バーンズの配下で活動することになり、フアレスからチワワ市経由でテキサス州イーグルパスへ送られた。土屋は死亡するか投獄されるようなことがあれば、日本の家族へ通知すること、ある程度の補償を要求した。土屋は Y. Shibuya の名前を使い、炙り出すと読める、見

えないインクで書いた報告書を S. Tamagi という名前あてにサンアントニオ郵便局留めで郵送した。フランクのスパイ技術は高い評価を受けた。53

翌年一月、フランク福田という諜報員がモンテレーでサンディエゴ計画に携わったアグスティン・ガルサ、別名レオン・カバヨに接触したときの状況を捜査局に報告している。このフランク・福田も土屋であった可能性が高い。54

七月初め、立松と早川はイッポリトとパンチョ・ビヤの娶った妻のうち最もインテリとされたルス・コラルからのメッセージを携えてチワワに入った。チワワ州南部で二人はビヤがドゥランゴ州マピミ周辺にいることを突き止め、早川は立松を置いてエルパソへ戻りストーンに報告した。このときストーンがパンチョ・ビヤを「生きたままでも死体でも」持ち出すよい方法はないか、と切り出した。ストーンはその方法については示さず、何か方法を考えるようにと言った。早川はマピミにいる立松と相談する、とだけ言って再び南へ向かった。55

一方、パーシング懲罰軍諜報部隊長リード大尉は、ストーンより二月も早く四人の日本人を雇っていた。皆パンチョ・ビヤの顔見知りで、一人一日五ドルを貰っていたのはアシエンダ・サン・ヘロニモを持つ条勉、マデラの藤田小太郎、同じくマデラの佐藤厚信、ペデルナレスの鈴木徳太郎であった。56

『日墨交流史』によると四人は何れも宮城県の出身で、佐藤、条、藤田は1906年、大陸殖民合資の第八回移民としてオハケーニャに、また、鈴木は同年の第九回移民としてコリマ鉄道に入った。「・・・条は数ヶ月でオハケーニャを離れ、チワワ州に移り、一時ラス・プロモサス鉱山に入ったが一年余りでそこを切り上げ、チワワ市内に食料品店を開き、1911年には北西鉄道のカタチ駅から約四十キロ隔てた郊外のゲレロ郡サン・ヘロニモに広大な綿作農場を経営していた。しかし、1912年5月にはオロスコ軍に襲撃され、その後、農場経営を断念している。他の三人の詳細な足取りは明らかでないが、おそらく北部を転々としたあと北西鉄道沿いに落ち着いていたのだろう。この沿線には彼らと同じ宮城県出身者が多かった。殆どが大陸殖民合資によって送られてきた者たちである。藤田はビヤ討伐のために越境したアメリカ軍部隊に食料などを売っていたという。」57

彼らは行商人になり、商品を買って込んでラバに積みチワワに入った。チワワ南部の住民の情報を頼りに次第に搜索範囲を狭めていた6月9日、条と佐藤はリオ・フロリドで、ビヤ派と疑われてカランサ軍に捕らわれ、列車でチワワ市へ連行され留置された。二人は六日間尋問を受けたのち釈放され危うく難を逃れた。条と佐藤はチワワ在住邦人の嘆願で解放されたと言ったが、実のところはビヤに関する情報をカランサ軍へ流すことを約束して放免されたようだ。四人は6月21日列車でヒメネスに向かい、翌日到着した。条と佐藤は藤田と鈴木を残して、村人の情報を頼りにドゥランゴの山中へと入り、6月28日、レオン・デ・カーニャの農場を本拠地にしていたビヤを探し当てた。58

二人が案内され母屋に入ると、ビヤは安楽椅子に座り、横に二つの松葉杖が置いてあっ

た。ビヤはげっそりと寝れ、黒い髭は伸び放題、片足に靴を履き片方は長い靴下で膝まで覆っていた。挨拶が終わるなり「何でこんな遠くまで来たのだ」とビヤが訪ねた。「エルパソでルス・コラルに会った時、包帯を届けてくれと頼まれ、昔の好で引き受けた」と条は応えた。ビヤは既に出発の命令を出していたが、二人が空腹であろうと食事の準備をさせた。

長い間外部と遮断されていたビヤは、二人に矢継ぎ早に質問した。アメリカ軍のこと、世間がビヤをどう思っているかを知りたがった。条はアメリカではビヤは死んだものと思われているが、メキシコでは多くの人々は生きていると信じていると答えた。以前応急手当を学んだことのある条は、ビヤの包帯を取り替えた。キャラコの布の包帯を取ると薬草の葉が傷口に貼ってあった。その葉を剥がすと、膿がにじみ出た。弾は膝の下、脚の裏から入り、前へ抜け骨が砕けていた。弾の入り口も出口も塞がっていたが、出口の上のほうから膿がにじみ出ている。条は苦痛で顔を歪めているビヤに、早く医者に見せて骨片を取り除くように言うと、自分は医者などにはかからないと応じた。

条が包帯を巻き終わる頃、ビヤ兵は馬に鞍を載せ出発の準備をしていた。既に夕闇が迫っていた時ビヤは大声でパラルへ向かうと叫んだ。二人は銃を貰いビヤ軍に混じってパラルへ向かって北上した。暫く進むとビヤ軍は突然東へ向きを変え、ヒメネスの方向へ進み始めた。パラルを攻撃すると宣言したのは陽動作戦であった。<sup>59</sup>

カランサ軍二百のヒメネス守備隊はビヤ軍千二百に敗れ、将校は処刑され百八十人の兵は「耳きり」ジェネラル・ウリベによって耳を削がれて釈放された。のちに耳のないカランサ兵を捕虜にしたら、たちどころに処刑するための目印である。ビヤ軍はヒメネスの町で乱暴狼藉の限りを尽くした。ビヤがそこに二日間止まっている間、条と佐藤はリード大尉の指示に従った毒殺計画を実行に移した。<sup>60</sup>

7月8日、藤田と鈴木が加わり四人は最後の打ち合わせをした。無味無臭の処方薬はパーシングの軍医がこの目的のためにリード大尉に渡したもので、三日毒と呼ばれ、服用三日後に死に至るものである。条は錠剤を二十個受け取り、二個を犬に与えて実験していた。結果は上々であった。もう一度試したかったが、その余裕はなかった。決行日を7月12、13または14日にして、錠剤十三個を使うことにした。四人は最後の水杯を交わし、藤田と鈴木は急いで北へ向かった。

条と佐藤は一服の毒をコーヒーカップに入れてビヤの前に差し出した。しかし、長年に亘り食物に毒を盛られるのを警戒していたビヤは、何か不審に思ったのか、そのカップに入ったコーヒーの半分を別のカップに入れて隣に座っているメキシコ人に渡し、その男が飲むのを待っていた。条と佐藤はビヤの様子を見て恐ろしくなり、その結果を見届けることなく、慌ててビヤの野営地を離れて逃げた。アメリカ軍に占領された安全な地域に入るまで、昼間は物陰に隠れ、夜移動した。二人がアメリカ軍へ報告したのは7月21日であった。<sup>61</sup>

条と藤田はその後のビヤの状況を調べる特命を受け、8月7日、懲罰軍司令部を発った。フアレス、エルパソ地区でビヤ派から情報を得ようとしたが、9月7日、結局藤田がビヤの本営へ行くことになった。しかし、その一週間後ビヤが健全であることをビヤ自身が証明した。9月16日独立記念日、ビヤはチワワ州都の奇襲に成功した。<sup>62</sup>

ビヤが毒殺を免れたのと裏腹に、ワシントンのパーシング懲罰遠征に関った政府高官は、その毒気に悩まされた。ストーンの毒殺計画に関する報告書が司法長官トーマス・ワッツ・グレゴリーに届くと、驚いた司法長官は直ちに国防長官にその写しを送った。このことが明るみに出ると、選挙を数ヵ月後に控えたウイルソン大統領に道義的、政治的に深刻な悪影響を与えかねなかった。ウイルソン自身も、閣僚も、そして大部分の国民も暗殺を政治的に正当化できる手段であるとは認めなかった。このことが露呈すると、パーシングにも危害が及ぶ恐れがあった。9月22日、彼は昇進を申請し、その三日後には認められていた。情報が漏れると、彼はたちどころに信用を失うことになる。一同が隠蔽工作に走ったのも無理からぬ状況があった。

国防長官は直ちにパーシングの属する南部管区総司令官に極秘調査を命じた。パーシングは、日本人スパイに関する報告書を多発したとして、部下の諜報担当将校を叱責した。全てがもみ消された。調査を命じられた二人の捜査官も取り消しに協力した。ストーンも突然全てを否定した。調査に当たった陸軍参謀本部ラルフ・ヴァンデマン大佐は報告書を見るまでもなく「毒殺するなどというばかげた事は、誰かのでっち上げに違いない」と書き、この話は公にならなかった。

国防長官ニュートン・ベーカーは、1917年2月、アメリカ軍及びパーシングに何等落ち度はなかった、として次のように言った。「本件について細微に亘り調査した結果、メキシコにいる遠征軍将校の中で、日本人が報告したような事実を知った者は誰もいなかった。日本人が独自に行った事は十分に考えられる。しかし、我軍の将校がこれを知っていたとは思われない。」

これ等の日本人は、アメリカ軍のみならずカランサ軍にもサービスを売り込んだと言う。1916年3月、彼等はメキシコ人スパイを取り仕切っていたエルパソ駐在メキシコ領事アンドゥレス・ガルシアにビヤ毒殺を申し出た。ガルシアはそのことをカランサに打電したが、カランサは断ったという。その三年後にはサバタを暗殺しているので、カランサが非道徳的と感じて断ったとは思われない。この話が本当であったとすれば、恐らくカランサは、日本人がそのようなことを簡単にやれるとは思えなかったのであろう。<sup>63</sup>

異様な日本人による毒殺事件が、パーシングが行ったビヤに対する最後の攻撃となり、アメリカ軍はそれ以降、専らカランサ軍と対峙して動かなかった。ウイルソンは遠征軍をカランサから利権を引き出すための取引材料に使った。1916年の暮れ、懲罰遠征軍の引き揚げ交渉がアトランティック・シティーで開始されると、ウイルソンの対墨政策が明

白になった。ウイルソンは武力でメキシコの領土の一部を併合するか、全土を支配することを主張する干渉主義者である企業グループやハーストなどの好戦論者の要求を無視し続ける一方で、懲罰軍の引き揚げの条件としてメキシコにアメリカの保護国になることを要求した。メキシコの代表団はアメリカ側に散々脅されて、首を立てに振る寸前まで行ったが、カランサガこれをアメリカのハッターと呼んで拒否した。ウイルソンは結局引き揚げた。ドイツとの戦争が最早避けられず、国境の南で軍隊を泥沼に浸かった儘には出来なかった。64

1916年12月15日、「ピヤ毒殺陰謀事件について」という見出しで、本社墨国通信員探墨生からの記事が二日間日米新聞に掲載された。その内容は以下の通りである。

チワワ市で一際目立つ店舗を構えるノルテ・ハポンは城（条のこと）、畑、高橋の三氏の共同事業で、市内には更に二店舗、マデラ、サン・ペドロにもそれぞれ一店舗を持っている。高橋氏が経営を任されていて、一日の売り上げは千ドルを下らないという。城は一万エーカーの農場を経営し、百余人のメキシコ人と日本人を雇う傍ら、鉄道の請負にも指を染め、チワワ州で条の名を知らぬものが無いほどの名声を博していた。もしマデロ革命が起きなかったなら、彼は百万長者になっていたという。

動乱がもたらした最初の不幸は、列車が不通となり貨車十台分のポテトが腐敗してしまった。次にはピヤが発行した軍票のため商店が大打撃を受けた。三万米ドルを投じて手に入れた銅山の経営も悪化し、三人は苦境に陥った。三氏は今、捲土重来の英気を養い、一時的な失敗を乗り越え、同胞のために万丈の気を吐かれんことを願う。しかし、気になるのは彼等の背後に藤田小太郎なる同郷の先輩があることを見過ごしてはならない。彼は教育あり、才知あり、文才あり、能弁、いわゆる口八丁手八丁で、金儲けに関しては手段を選ばず、義理人情を度外視して辛辣の手腕を振り、公使館も要注意人物に上げているという。自分は、城が忌々しい毒殺などに手を染めたとは信じられないが、もし事実であったなら藤田の計画によるものであると思う。ピヤが負傷したとき、城君は自分の農園内に彼を匿い治療を施した。そのため政府軍の激を招き銃殺の刑に処せられるところを免れて行方をくらませたということであった。これは有りうる事だと思う、何故なら、城君とピヤは浅からぬ因縁がある。マデロ革命戦後、ピヤの一の子分某が負傷したのを彼の農園で手当てをし、加療したため、ピヤは志を得た時代になっても城君とは親しく交際をしていた。挑発略奪手当たりしだいに振舞ったピヤも、城君の農園に限り牛馬はもとより何一つ挑発することを厳禁した位礼を尽くし彼を信じ、彼と親しかった。このような間柄であるから、一敗血に塗れたピヤが負傷したことであるから一片の義気で生命を賭して親友ピヤを隠匿したとしても、それはあるべきことだと思っていた。

一般同胞の口に毎日上る風評や新聞などの通信で見ると、全然事件の内容が相応しくない。城君はチワワ第一の事業家で人格高き人で、いかに困窮したといえども五万ドルの目腐れ金のために自己の信用を濫用して、自分の親友を毒殺するようなことが出来ようか、

恐らく出来まいと思う。もし不幸にして事実であるとするれば、それは風評通り、城君の発意でなく、参謀総長藤田の計画であらねばならぬ。正も不正も眼中に無き藤田は、事業の失敗や女に巻上げられたりして、今や身動きも取れぬ境遇に居る。斯様の場合にビヤ首魁五万ドルの懸賞は、藤田をしてこの計画を思い立たしめたのは、あるべき事であらねばならぬ。さりとて臆病なる彼は自ら進んで実行する勇氣は無い、狡猾な彼は危地に臨むようなことがあるか。それで彼は城君がビヤと親密なる関係を利用するのが最も賢なる手段であると思いついたのであろう。その間の消息を明らかにすることは難しいが、チワワ州の同胞やエルパソに來ている日本人間の風評は正に、以上の通りである。終わりに、チワワ事件なるもの以上述べた通りであるが、どうかこれが一場の夢物語であり風評であらんことを祈り、且つ前途有為の青年城君が将来共に決して藤田輩と親しまず、あくまで真面目に発展をしてもらいたいものである。65

1917年2月10日、「余に対する諸種の憶測に対し弁明す、ビヤ毒殺陰謀は全然虚説なり、二月六日エルパソにて」との見出しで条勉の公開状が日米新聞に掲載された。

「日米新聞紙上で始め茂木清吾君により火蓋を切られた予に対する諸種非難憶測の記事は、その後幾多の人々に依り報道論評せられ最後に一葉生君により繰り返されたれば、先に世評にはあえて頓着せぬとまで決意せる予は世間の誤解を解かんがため一応弁解するの要を認めたり。茂木清吾君が未だ墨国に在りし当時、北墨産業株式会社設立の件を持ち出し來り、予もそれに賛成し最早之れに着手せんとするに際し、氏の未だ準備の不完全なるを看破せる予は断然之を拒絶したれば其後氏と予とは絶交の姿なれり。一葉生君は予の一面識もなき人物なり。

さて之まで予に対する非難攻撃の諸点を総合すれば、予はビヤ將軍の暗殺を企てて失敗せる為め將軍は大いに怒り、日本人と見たら片端から殺害すべしと部下に嚴命を發し、之が為め福島県人の斉藤萬三郎同鈴木辰吉なる者はすでに犠牲となれりと。然れども右の二氏は殺害せらるる処か目下ビヤ將軍勢力地帯に在りて何等の危害を蒙らぬのみならず自由に商売をなし居れり。暗殺を企てたる張本人なりと呼ばれたる予の農場は昨年同將軍の蔭にて無事收穫を収めたり。之れ收穫時期に當り小作人らは予の不在を見て、小作料を収めざらんと種々の方法を講じたが、当時のビヤ將軍は予の農場に根拠地を据え居りし時なれば、予の雇い人なる河村(宮城)関根(栃木)の両氏は事の由をビヤ將軍に訴えし所將軍は大いに同情し小作人(墨国人)等に対し予の不在を目して勝手な行動を取るならば用捨せざるべしと命じたるより彼等小作人は驚きて小作料を満足に収め得たる為なり。目下ビヤ將軍は予の農場を大本営とし居れるが予の雇人は何等の危害を受けざるのみならず却って同將軍保護の下に無事に作業を継続し居れり。

殊に予の件に関して材料を提供したる佐藤勝江君は近頃ビヤ軍勢力地帯を旅行中、突然兵士等に捕縛せられ日本人たるを証明して無事解放せられたる位なり。予は今年の今頃ビヤ將軍がソノラに敗れ、殘兵を率いて予の農場に來り、二ヶ月以上も滞在し居たるよりも

不止得其間ピヤ將軍と起居を共にしたるが、其後將軍は北進し予はチワワ市に出でたれば此時世間は噂して曰く予はピヤ將軍と何事かを謀れりと、然れども其の後ピヤ將軍がコロンプスを攻撃したる結果、米軍が之を迫撃し来り重ねて予の農場に駐割したりしかば予は農産物を此の米軍隊に売却する目的を以って農場に帰り行きしに世間は噂して予は米国陸軍の参謀と何事かを密約せりと言う。

近頃予は又予の農場に向け出発する積りなるが世間は又重ねて噂せん、予は何事かピヤ將軍の使命を帯びて行くならんと。然し予は決して何人とも軍事或は政治に関係あるものに非らず、唯予の職業を帯ぶるのみ。終りに臨んで在墨同胞諸君に告ともなし能はざる処なれば吾人の力のおよばざるは是れ当然のみ。従つて斯かる場合は各自適当に最善の工夫を為して危害を受ざる手段方法を講るより外なしと信ず。」<sup>66</sup>

『日墨交流史』によると、1917年4月6日、条が経営していたサン・ヘロニモの農場に現れたピヤ軍によって三神篠三郎（宮城県）、渋谷伝太郎（福島県）、関根竹三郎（栃木県）の三人が射殺されたと記している。条が日米新聞に公開状を送った二月後のことであつた。三人はピヤの前に引立てられ、ピヤ自ら彼らを射殺した。渋谷は憲政軍の大佐としてピヤにとつても股肱の士であつたという。<sup>67</sup>

52. Charles H. Harris III and Louis R. Sadler, "The Border and the Revolution, Clandestine Activities of the Mexican Revolution: 1910-1920", High-Lonesome Books, 1988, P8
53. Ibid. P10
54. James A. Sandos, "Rebellion in the Borderlands, Anarchism and the Plan of San Diego, 1904-1923", University of Oklahoma Press, 1992, P164
55. Charles H. Harris III and Louis R. Sadler, "The Border and the Revolution, Clandestine Activities of the Mexican Revolution: 1910-1920", High-Lonesome Books, 1988, P11
56. Ibid. P13
57. 日墨協会・日墨交流史編纂委員会「日墨交流史」現代企画室、1990、P400
58. Charles H. Harris III and Louis R. Sadler, "The Border and the Revolution, Clandestine Activities of the Mexican Revolution: 1910-1920", High-Lonesome Books, 1988, P13 & 14
59. Eileen Weisome, "The General and The Jaguar", Little, Brown and Company, 2006 P291-296
60. Charles H. Harris III and Louis R. Sadler, "The Border and the Revolution, Clandestine Activities of the Mexican Revolution: 1910-1920", High-Lonesome Books, 1988, P15
61. Ibid. P16
62. Ibid. P17
63. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P610
64. Ibid. P611
65. 日米新聞、Dec. 15 and 16, 1916
66. 日米新聞、Feb. 10, 1917
67. 日墨協会・日墨交流史編纂委員会「日墨交流史」現代企画室、1990、P403